

格差解消のカギはこれです

# 町工場がニッポンの未来を拓く

ものづくりの拠点が国内から海外へと移って久しい。製造業の未来、そして町工場再生のヒントはどこにあるのか。日本の製造業の現場を訪ね歩いてきたエキスパート、政策研究大学院大学の橋本久義教授に話を聞いた。

政策研究大学院大学特任教授

## 橋本久義

●はしもと・ひさよし 1945年福井県生まれ。東京大学工学部卒業後、通産省入省。「現場に近いところで行政を・学問を！」をモットーに、これまで3630以上の工場を訪問。研究テーマは発展途上国の産業発展、中小企業の活性化など。著書に『中小企業が滅びれば日本経済が滅びる』（PHP 研究所）ほか多数。

## 町工場は町の守り神

昨年末に日本語版が発売された大きな話題となったトマ・ピケティの『21世紀の資本』（みすず書房）は、資本主義の特徴を「格差社会」だと述べています。過去二百年以上のデータから、資産によって得られる富のほうに、労働によって得られる富よ

りも早く蓄積される。その結果、富める者はますます富み、貧しい者はさらに貧しくなって、所得格差が開いていくと言っています。

それでもこの二百年の間には二度の大戦がありましたから、戦争は富める者にとっても貧しき者にとっても平等に過酷でした。開いてしまった経済格差を縮める効果があった。

しかし戦後七十年が経ち、日本で

は所得格差の問題が深刻化していません。ピケティさんが指摘するとおり、資本主義社会の弊害が出てきているのです。

私は、この問題を解決とまではいなくても、格差の拡大化を遅らせるヒントは「町工場」、つまり製造業にあると思っています。

金融や株取引などの世界では、ごく少人数で年間一千億円を稼ぐこと

があるでしょう。しかし、製造業ではそうはいきません。一人で一億円を稼ぐのも難しい。せいぜい数千万円。そうすると所得格差は数千万円以上開かない。よしんば開いたとしてもせいぜい一億円ぐらいだと思います。

その一億円を売り上げるにしても、多くの人の協力を仰がなければなりません。材料屋の親父が材料を間違えず、下請けの工場がきちんとものを作って、宅配便のお兄さんが決まった日時に正確に届け、食堂のおばちゃんが生産で働く人たちのためにおいしい食事を作ってくれないといけません。

つまり一億円を売り上げるまでの過程には、さまざまな職種の人々の働きと暮らしがあって、多くの人によって支えられている。ごく限られた一部の人間が富を独占するのは

なく、多種多様な業種・職種の間が共存できて経済格差や不安の少ない社会を目指すには、町工場、とくに中小企業の製造業の活性化こそがカギとなるのです。

町工場は「町の守り」としての役割も果たしていると思います。鉄工所や畳店でも、そこに働く人がいて、当然人の出入りがある。生活空間と仕事場が近いということは、始終人の目があるわけですから、怪しい人はウロチョロできません。ある意味、犯罪の抑止力となっていたともいえる。

子供にとつて、働く大人の姿が身近にあることも大切です。汗水たらして働く大人の姿を実感できる。そうすると、仕事をする意味、お金を稼ぐことの意味、その重要性や苦勞というものが、子供たちによりリアルに感じられたのではないかと

と思います。

経済格差と同じく、いまの日本で重要な課題なのが、人口減少と地域格差の問題です。昨年出版された話題になった増田寛也さんの『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』（中公新書）では、人口減少によって将来的に八百九十六の市町村が消滅するのではないかと言っている。これももつともな意見です。

しかし、地方消滅を遅らせるポイントもまた、製造業にあると思います。製造業に必要なのは、何よりも地域であり、そこで働く人々の生活する場、コミュニティです。それぞれの地域でごく普通の、つまりそこそこの暮らしを営むことができ、ものづくりを通して人と人が関係を結び、ひいてはその町や、地域経済に活力を吹き込む。そういうことを取り戻すことが大切なんです。